

# 播磨

第 二 卷      第 五 號

- 宍粟郡古社研究(一)……………鎌谷木三次(一)  
加東郡上東條村秋津住吉神社の百石踊歌(二)  
……………谷川良順(七)  
河本正義(七)  
金雞傳説資料集成(一)……………淺田芳郎(二)  
播磨虫送りの二三の傳聞と報告……………玉岡松一郎(二三)  
印南郡西神吉村宮前の虫送り・雨乞ひ・亥の子  
……………喜多山明(二五)  
姫路城東の虫送り……………島田清(二六)  
花に關する民謡二三……………淺田茂(二四)  
播磨物産展覽會出品玩具及置物類目錄(一)  
……………奥光一史(二七)  
播磨郷土研究要典と播磨考古學地名辭書に就て  
……………淺田芳郎(二八)

播磨郷土研究同攷會

查の種を育める事なるのであるから、それも差支ないわけである

花の眞味を知らんと欲せば  
三五月をふんで来たれ

# 印南郡西神吉村宮前の虫送り・雨乞ひ・亥の子

## 喜多山 明

### 虫 送 り

舊六月十六日の夜八時頃から十時頃にかけて行はれた。但し略々明治三十年來行はれてゐぬ。小麥藁を巻きつけた一丈許りの竹の端に郷社八幡神社神主が燈火の火をつける。五、六十人の村人が各人それを捧げ、

稲の虫も綿の虫も

いんにやれのーく

と謡ひながら部落の東北大池をほど起點として西方へと廻る。結局松明が消えれば、處えらばす捨てる。かくして各人に於て行事を勝手に終了する事になる。

同様の事が略同年代時期に、東神吉村出河原・加古郡氷丘村中津に於ても行はれた。それがこの宮前より鮮かに映じたものである。

### 雨 乞 ひ

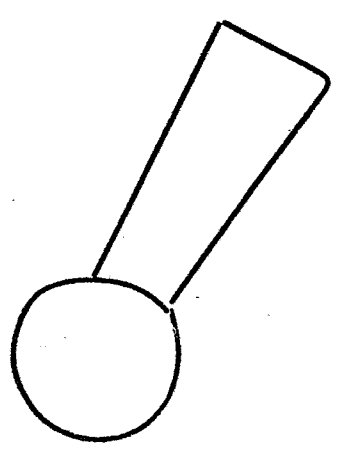
最近に於ては大正十二年にあつた。明治四十年頃にも行はれた。

参加する部落は郷社八幡神社氏子の、即ち、東神吉村天下原・神吉・西神吉村宮前・中西・大國・西村・鼎の七部落である。

五、六百人もの村人が拜殿に參籠する。祭壇を設け、燈火を持つて来て、それを村人達各々の松明にうつす。かくして村人は各自勝手に村中を松明かざしながら廻る。

### 亥 の 子

インノコといひ明治三十年頃以前には行はれてゐた。



の形の三尺五寸乃至四尺位の藁棒をつくり(圓狀の所——手で握る所を殊にかたく藁のすべでまきつける。棒狀の所も勿論かたくまきつける)

亥の子(ゆい)といひ

そーばのかいもち

なんぢやいな

と稱へながら、家々の軒をたゞきまわる。

(本報告は、喜多山氏の談話により乍粗成文す。玉岡生)